

# 送還日記

2006(平成18)年3月2日鑑賞<松竹試写室>

★★★★



監督=キム・ドンウォン/登場人物=チョ・チャンソン/キム・ソンミョン/キム・ヨンシク/リュ・ハヌク/キム・ソッキョン/シン・イニョン/チン・テユン/アン・ハクソプ/ハム・セファン (シグロ、シネカノン配給/2003年韓国映画/148分)

## 第2章

面白くてタメになる

……南(韓国)から北(北朝鮮)へ「送還」されるのは、非転向長期囚の北のスパイたち。この映画の主人公は、30~40年という長期の拘束と拷問に耐え、非転向を貫いた人物を中心とする9名の人たちだ。南北朝鮮分断の悲劇は、さまざまな映画のテーマとして描かれているが、これは何ともしどきument映画。戦後日本の60年間の平和をかみしめながら、じっくりと鑑賞したいものだが、そのためにはあなたの感性を研ぎ澄ますことが大切だよ……。

## ドキュメント映画 VS 一般映画

私はドキュメント映画はあまり好きではない。それは多分、現実世界を写し出すドキュメント映画よりも、つくりモノの世界を描く一般映画の方が夢があり、その時間だけでも自分を自由に解放できるからだろう。つまりドキュメント映画は、逃避したくても逃避できない現実の生々しい問題点や本質を、うまく2時間前後にまとめて観客にみせつける芸術。したがって、そこでは想像の世界をつくりあげる一般映画以上に、監督や編集者の責任(視点)のウエイトが大きいことになる。

## 何ともしどきument映画！

一般的なある家庭のある子供の成長記録をドキュメント映画としてつくった場合、それは家族たちにとっては記念すべき価値ある作品かもしれないが、赤の他人にとっては何の価値もないもの。ところがこの映画がドキュメントしようとし

たターゲットは、9人の北朝鮮からの非転向長期囚のスパイたち。

時代は1992年、ある神父の依頼でキム・ドンウォン監督が、自分の住んでいるポンチョン洞に連れてきたのはチョ・チャンソン、キム・ソッキョンという2人の老人。彼らは、北朝鮮のスパイとして逮捕されて30年以上服役し、ひどい拷問に耐えて非転向を貫いてきた老人たちだ。そんな彼らの許可を得て、キム・ドンウォン監督は彼らの姿をカメラに収めはじめた。これがこの何ともすごいドキュメント映画のはじまりだ……。

## 「転向」と「日本共産党」……？

「転向」という言葉は「信念を曲げた」という意味を含んでいるため、一般にマイナスイメージを含んだ言葉として理解されている。もっとも、価値観の対立とりわけ政治的対立が弱くなった戦後の日本では、「信念」とりわけ「政治的信念」が失われているため、その反面としての「転向」という言葉も半分死語になっている。

しかし、私が1967年からの学生運動の中で勉強したのは、マルクス・レーニン主義の古典的文献の他、日本共産党に関する数々の文献で、その中には①「六全協」の総括、②徳田球一 VS 宮本顕治、③宮本顕治と宮本百合子の「獄中12年の手紙」など、日本共産党の血なまぐさい内部抗争と転向問題があった。

映画『戦争と人間』3部作（70～73年）や『小林多喜二』（74年）などでも、特高警察による日本共産党の党員や活動家に対する弾圧・拷問の姿がリアルに描かれているが、それはいくらリアルといっても所詮映画上の話で、現実とは異なるもの。現実には過酷な拷問によって「転向」した人の方が多はず。したがって、「転向」した長期囚たちもこの映画に登場する。

もっとも、私はこのドキュメント映画を観てはじめて「人間はなぜ拷問に耐えられるのか」「なぜ転向しなかったのか」という問いに対する回答が得られたと思ったが……。

## 『日本共産党の戦後秘史』と『転向上・下』

2005年9月10日付で兵本達吉氏の『日本共産党の戦後秘史』が出版され、10月

2日付産経新聞の書評でこの本の紹介を読んだ私は、さっそくこれを購入した。目次だけでもなつかしい言葉がズラリと並んでいることに妙に感激することに……。

ここで思い出したのが、大学時代の後半である1969年に上巻を、1971年に下巻をそれぞれ購入し、勉強会のネタとしていたのが『転向』という2冊の分厚い本（思想の科学研究会編・1959年初版・平凡社）だったということ。そこで、この昔の本と対比して、あらためて「転向」問題を考えた次第……。

徳田球一、志賀義雄、宮本顕治、野坂参三、袴田里見らズラリと並ぶ日本共産党の有名な指導者たちでも、徳田球一と志賀義雄が「獄中18年」とその最長さを自慢(?)している程度。それに比べれば、このドキュメント映画に登場する9人のスパイたちは、獄中30年から何と最長45年という気の遠くなるもの。一生のうち1度くらいは、こういうドキュメント映画を観て、極端に非日常的な世界を想像してみることも必要なのでは……？

## 「送還」とは？

「送還」とは、2000年9月2日に実施された、南（韓国）から北（朝鮮民主主義人民共和国）への北朝鮮スパイ63名の送還のことだが、この映画はそのタイトルどおり、そのうちの9名についてのキム・ドンウォン監督の「送還日記」だ。

南北朝鮮の分断とその統一への悲願は数々の韓国映画で描かれるテーマだが、この『送還日記』に登場する9人の非転向あるいは転向を余儀なくされた長期囚の送還と残留を理解するためには、30年前、40年前になぜ彼らが北から南に潜入し、そして逮捕され投獄されたのかを理解することが必要。もっとも、そのためには膨大な勉強が必要だろう。

戦後60年の日本の歩みは、戦後復興の10年間を除けば、自民党結党50周年でよくわかるように、自民党の歴代内閣の歩みを素描すればよく理解できる。それと同様に、南北分断後の韓国の歴史も、歴代大統領の歩みを素描すればわかるはず。北からのスパイの送還運動が本格化したのは1999年からだが、2000年の「6.15南北共同宣言」を契機にそれが急速に進んだらしい。

どこまで勉強するかは各自の興味の持ち方次第だが、これらの点についての最低限の勉強が不可欠。

## 2日連続の「重たい」ドキュメンタリー映画にお疲れ……

3月1日のドキュメンタリー映画『スティーヴィー』が2時間25分。そして3月2日のこれが2時間28分。そもそも私はドキュメンタリー映画を観ること自体が少ないのだから、このように2日連続でドキュメンタリー映画を観たのははじめての経験。そのうえ両者とも長時間だし、そのテーマも重たいもの。半分義務感で出かけていった私にとって、大いに勉強にはなったものの、同時に大いにお疲れ……。

その反動(?)か、3月3日に観たディズニー版の『南極物語』の楽しかったこと……? 8匹の犬たちを主人公とした物語のわかりやすさと単純な感動にホッとしたもの。どちらの映画がいいかは別として、私は本当に2日間お疲れサマでしたと、自分を誉めてやりたいが……?

2006(平成18)年3月4日記

ミニコラム

### ドキュメンタリー映画はお勉強!

私流のドキュメンタリー映画を観るコツは、最初から娯楽と考えず勉強だと身構えて観ること。また予習と復習を欠かさないことも当然。

『送還日記』(03年)は南北朝鮮分断の悲劇が勉強ネタだが、私のお薦めドキュメンタリー映画は、中国瀋陽にある重厚長大型の国営企業鉄西区の衰退を描いた『鉄西区』(03年)と66年から10年間にわたって展開された文化大革命と紅衛兵運動の中、革命の聖地延安で生まれた娘の父親探しの旅を描いた『延安の娘』(02年)の2本(『シネ

マルーム5』369頁、373頁参照)。

『鉄西区』は9時間5分という超大作だが、是非観てほしい作品。

最近のお薦めは、中国山西省に残留部隊として留まることを余儀なくされた兵士たちの真実の姿を赤裸々に描いた『蟻の兵隊』(05年)。小泉総理による8月15日の靖国神社参拝が行われ、「ポスト小泉」による日中外交のあり方が新たに模索される今、これは貴重な映像となるはずだ。

2006(平成18)年8月16日記